

## トピックス

## 社会的学習

松島暢志

学習は、「経験を媒介として、生活体の行動が比較的永続的に変容すること」と心理学では定義されます。和顔愛語46巻38ページに詳しく説明がされています(鈴木, 2018)ので参照してください。本項では、学習の一つの形態である社会的学習について説明していきます。

社会的学習とは、分かりやすく言えば「他者からの学習」ということです。皆さんが学習に関して最初に習う、古典的条件付けによる学習やオペラント条件付けによる学習は、学習者自身が経験を繰り返すことによって行動の変容が起こります。しかしこれは、効率性という観点でみれば、コストがかかったりリスクがあったりします。例えば、『新しく入手したスマホアプリの正しい使い方』を学習する事例を考えてみましょう。私たちは、実際にアプリを起動し、いろいろ試して、上手いかないことを何度も経験しながら、最終的に正しい使い方を学ぶことができます。しかし、それは無駄な時間も多く非効率でもあります。それをするくらいだったら、そのアプリに詳しい誰かに聞いたり、その人の使い方を見て真似をしたりして覚える方が、はるかに効率的です。このような他者からの学習を社会的学習といいます。心理学者のトマセロ(Tomasello, M.)は、ヒトはこの社会的学習が得意なため、素早く情報を伝達することができ、他の生物と比べて高度な文化を作り上げることができたと主張しています。

この社会的学習を、ヒトは幼いころから行っていることも分かってきました。赤ちゃんは、自分よりも知識があり、自分に教えてくれるであろう他者(多くは大人)に注意を向けたり、マネをしたりします。メルツォフ(Melzoff, A.)

は、生後まもない新生児が、他者の顔の動きを真似する場合があることを報告しました。また、大人がアイコンタクトをしたり、対乳児発話(IDS、マザリーズとも呼ばれる、赤ちゃんに向けられる、通常よりピッチが高かったり、ゆっくりだったりする話し方)をすると、赤ちゃんの学習がより進むということも、チブラ(Csibra, G.)たちの研究から示されています。

しかし、他者から学ぶ社会的学習が効率的とは言え、どのような他者でも無差別に信じて学習するのは賢い戦略とは言えません。なぜなら、全ての他者が必ずしも有益な正しい情報を提供するとは限らないからです(先述のスマホアプリも、初心者行動を真似しても正しい使い方は学習できないでしょう)。実は、子どもはかなり早いうちから学習する相手を選んでいるということも、さまざまな研究から明らかになってきました。例えば1歳を過ぎた頃から、自分の判断に自信がない時にだけ大人の助けを求めます(グーピル;Goupil, L.)。また3歳頃からは、見知らぬ大人よりは、見知った大人からの情報を取り入れることも分かっています(ハリスとコリボー;Harris, P. & Corriveau, K.)。子どもであっても無差別的に社会的学習を行うわけではありません。自分にとって必要な場合に、そして信頼できそうな相手から、選択的に社会的学習をしていると考えられています。

## 〈引用・参考文献〉

メイザー, J. E. (著), 磯 博行・坂上貴之・川合信幸 (訳). メイザーの学習と行動 日本語版第3版, 二瓶社, 2008年